

らず、不通の様に候、聊ささ心疎そにあらす候、よつて香春・馬岳と申し談じ、そこ表に至り少人数差出候、相応の行て仰せ談じられ候、なお口上を用い候、恐々謹言

三月十五日

種実(秋男)
花押

萩原山城入道殿御賀所

原漢文体

右の史料は秋月種実から、宇佐郡敷田庄の名主的領主萩原氏へ、香春岳の高橋元種、馬岳の長野三郎左衛門と相談して宇佐郡へ少人数を派遣してちよつとした作戦を展開するという通報である(『萩原』)。

今度出勢につき、馳走の段、祝著せしめ候、然らば敷田庄内二十五町地の事、知行有らしむべく候、向後、忠儀を励むべき事肝要に候、なお土師但馬守・安田山城守申すべく候、恐々謹言

九月廿一日

高橋元種(花押)

萩原山城入道殿

原漢文体

天正十年には、右の史料のように、下毛・宇佐郡の武士の過半が高橋氏の支配に従うようになったため、天正十一年に、大友氏の大反撃が行われたが、東部二郡を一時的に制圧したに過ぎず、豊後勢が帰国すると、また高橋方の優勢に戻り、天正十四年十月、豊後・四国勢が豊前に入国するまで、大友方は妙見岳に籠城をつづけるような有り様であった。

高橋紹運・

天正十四年、南と西から島津勢が接近し、北から秋

岩屋城落城

月・高橋勢の侵入に晒さらされて、居たたまれなくなった

大友宗麟は、三月に上阪、四月、大坂城の豊臣秀吉に西下を懇願したため、秀吉は、この年七月、長宗我部元親・仙石秀久の四国勢を豊後へ送り、黒田官兵衛に毛利氏の中国勢を付けて、筑前へ送って岩屋城に籠城する高橋紹運を救援させようとした。しかし、岩屋城は七月二十七日落

城し、紹運は壮烈な討ち死にを遂げ、救援が間に合わなかった。紹運の子立花統虎の籠る立花城は、黒田官兵衛の入城で、島津勢を撤退させた。

島津義久と連携し、大友氏を挟撃する態勢を整えつつあった秋月種実方の高橋元種は、小倉城を部下に守らせて、自身は香春岳城に楯籠り、障子岳・馬岳・宇留津・岩石城を出城として防禦線を敷いたが、島津勢が撤退し、秀吉本軍三〇万の大軍の到着で出城は次々と攻略され、元種や種実も助命を乞うて赦され、日向へ移封された。

〔石清水文書〕

注進 弥勤寺喜多院所領庄園名田末寺末宮別保等事

合

豊前国

- 位登庄六十町(中略) 霧野庄六十町大橋也 宇原毎田名田 島原庄庄田八丁 大野
 - 井庄庄田八十町 (中略) 伝法寺 伊田別符百卅町 乙見別符二十五丁 護壽名
 - 田卅町 吉成八町 川島名六町 時成五町 豆勝国三十町 貫勝国六丁 菊丸
 - 名田七丁 打々別符六丁 荒津別符卅町 上松別符十八町 日奈土別符卅丁
 - 池尻別符卅五丁 記多良野別符十三丁 夏焼名田六十丁 中観寺三丁 入学寺
 - 五十丁 流末絹富卅丁 同益益枝末八丁永意 全丸六丁 同香丸十丁 三郎丸五
 - 丁 少丸丸七丁 今男丸十丁 法師丸三丁 菩提院八丁 屋山福丸七丁 冲田
 - 今男六丁 壽光清永三丁 光国八丁 延永名田十丁 富河内二十丁 今任卅丁
- 已上、豊前国五十五箇所 (下略)

〔吾妻鏡〕(一一八七) 文治三年九月二十二日の条

所衆信房弓字都 為御使下向鎮西、是天野藤内遠景相共可追討貴海島

之旨、依_レ含_レ敵命_一也、(中略)今度河辺平太通綱到_レ件島_一之由聞食之間、殊所_レ思召企給_一也云々

〔吾妻鏡〕文治四年三月五日の条

所衆信房去月之比、自_二鎮西_一進_二書狀_一、貴賀井島渡事々言上、去年依_レ頼_二彼所形勢_一海路次第令_レ函_レ之、就_レ覽是、為_レ難儀之由諸人依_レ奉_二諷詞_一、頗雖_二思召止_一、御覽彼絵圖_一之後、強不_レ可_レ疲人力_一之由、更思召立云々、此事、信房殊竭_二大切之間_一、今日所_レ被_レ加_レ賞也、

〔吾妻鏡〕

文治四年五月十七日 遠景已下御使等、渡_二貴賀井島_一、遂_二合戰_一、彼所已_レ婦降之由、而宇都宮所衆信房、殊施_二勲功_一云々

〔宇都宮文書〕

下 豐前国伊方庄住人
(源賴朝) (田川郡) (花押)

補_二任地頭職_一事

前所衆中原信房

右、前地頭直種不_レ渡_二貴賀井島_一、又追_二討奥州_一之時、不_レ参会、依_レ此兩度過意、可_レ停_二止彼職_一也、依_レ信房所_二補任_一也、於_二限有課役_一者任_二先例_一可_レ致_二其勤_一之状如_レ件、以下

建久三年二月二十八日
(一九三)

〔到津文書〕三三三

一、信房申、前大宮司公定宿祿差遣扶持人等於豊前国上毛郡尻高浦、令_二夜討_一殺_二害右馬允秀忠_一之由事、(中略)

承元三年十二月六日
(一一〇九) 相模守義時御判
宇佐大宮司殿

〔泉涌寺文書〕

山城国紀伊郡東山泉涌寺江寄進之事、寺領於_二所々_一合十七町永代成敗不_レ可_レ有_二相違_一、所之目錄_{別紙}令_レ可_レ被_レ抽_二法盛_一、仍後世龜鏡状、如件
建保五年七月二十五日
(一一二七) 藤原信房(判)

〔泉涌寺不可乘法師伝〕

同年八月、依_二後州刺史朝散大夫中原信房之請_一、率_二徒弟子六七許輩_一、下_二向鎮西豊前国_一、信房從_二法師_一、出家受戒、法名道賢、夫婦各營_二逆修善根_一、十七箇日法師便以掃洛

〔宗像文書〕正文者大和史太郎右衛門尉信定申請之由、裏書在_レ之

宗像社領内牟留木(中略)名等事、度々辞退候之上、西嶋弥二郎所領被_レ召候之間、可_レ被_レ相博_二欵之由_一、駿河二郎申候之間、牟留木・宮田・二郎丸名等者被_レ付_二社候畢_一、(中略)

嘉祿三年五月十三日
(北条泰時) (北条泰時) 武藏守(花押)

〔末久文書〕「到来貞永元年十月三日」

守護所下 在判 成恒大三郎国守

可_レ早任_二六波羅殿御下知旨_一参上并_二申子細_一、大和太郎兵衛尉時景訴申巧_二新儀_一不_レ從_二地頭_一由事
右、今年八月十八日御下知、今月八日到来、備_二大和太郎兵衛尉時景訴状_一

副証如_レ此候、如_レ状者、豊前国上毛下毛兩郡吉富名地頭職相伝知行内、名主下作人等巧_レ新儀、不_レ從_レ地頭云々、子細何様事候哉、早於_レ宰府、召_レ決兩方、尋_レ究淵底、可_レ令_レ注_レ進申詞記候、仍執達如_レ件者、件事、早任_レ被_レ仰下_レ之旨、參上可_レ弁_レ申子細之状如_レ件
(二三三)
貞永元年閏九月九日

〔未久文書〕「到来貞永元年十月三日」

追申、吉富事、大三郎国守同被_レ載_レ于太郎兵衛尉_レ状候、件人祇_レ候
(武藤資能)

御辺_レ人口状者同召具可有_レ御上府_レ候也、恐々謹言
(八月晚)

大和太郎兵衛尉被_レ申下_レ候、今年十八日六波羅殿御下知、今月八日到来、

写案献_レ之候、子細雖_レ見_レ状候、如_レ状者当国上毛下毛兩郡吉富名地頭職

相伝知行内、名主下作人等巧_レ新儀、不_レ從_レ地頭云々、何様事哉、早於_レ宰

府、召_レ決兩方、尋_レ究淵底、可_レ令_レ注_レ進申詞記_レ由、可_レ被_レ仰下_レ候

也、件事任_レ御下知状、急可_レ御上府_レ候也、記_レ録兩方御申状、可_レ令_レ注_レ進

上六波羅殿_レ候之由、可_レ相存_レ候也、恐々謹言

閏九月十七日

(武藤資能)
右衛門尉 在判

成恒太郎殿

〔永弘文書〕

豊後国御家人富来又次郎申、_レ大和老岐入道昇連被_レ押_レ領野_レ内是則

名田島_レ事、訴状遣_レ之、_レ状召_レ決兩方尋_レ明子細、可_レ被_レ注_レ進_レ

之状、依_レ仰執達如_レ件

(二四七)
宝治元年十月十七日

(北条重時) (在御判)

左近将監

(北条時頼)

相模守

在御判

(武藤資能)
豊前々司殿

〔宇佐宮記〕太宰管内志所収 〔益永文書〕八一三・四・五参照

造宇佐宮用途事、如_レ注進状_レ者、役所者任_レ先例、以_レ錢貨一貫文、可_レ

募_レ准絹三十疋之由申_レ之、請役人者直法減直之間、可_レ納_レ十五疋之旨申

也云_レ者、近年、和市之法減直也、称_レ先例_レ者有_レ齋沙汰煩、更無_レ過畢之

欺_レ欺、所詮就_レ折中之法、准_レ貳拾疋、相互無_レ違乱、可_レ令_レ致_レ其沙

汰_レ之状、依_レ仰執達如_レ件

(二五〇)
康永元年十二月十六日

(北条長時)
武藏守判

(北条政村)
陸奥守判

(武藤資能)
豊前司殿

(宇都宮信景)
老岐中内左衛門殿

〔未久文書〕

四月十六日御教書、同十九日到来、謹以_レ拜見仕候畢

抑、西郷太郎左衛門尉信定令_レ致_レ濫訴_レ候政範所領秋成、底無_レ二郎丸兩名

事、如_レ信定申状_レ者、政範令_レ通_レ避問注_レ候云々、信定於_レ訴人身_レ、令_レ拒_レ

对決_レ候、伺_レ隙乍_レ中_レ下御教書、度々令_レ逃下_レ候之間、政範申_レ付五通召

文、御教書召上代官已遂_レ三問三答訴陳_レ畢、然政範問注_レ遁避候之由、掠

申候之条、奸謀候、彼訴陳状等書、直可_レ進上_レ之由被_レ仰下_レ候之間、書_レ

調之、信定參上相待計候、所詮信定代官參上間、且為_レ問答_レ任_レ被_レ仰下_レ

候旨、進_レ上代官帥阿闍梨成頭_レ候、委細令_レ言上_レ候欵、以_レ此旨_レ可有_レ

御披露_レ候、恐惶謹言

卯月晦日

左衛門尉政範請文

〔未久文書〕

上毛の大巾島の島地七反か事、山田左衛門尉(和左)わよのきにつきて、さり給候う多へ、(自余)しよの事訴訟をとめ候ぬ、且山田の状給候畢、此上者向後、不可有別子細候、恐々謹言

弘安三年四月廿三日

少尉信定在判

謹上老岐太郎左衛門尉殿御返事

〔未久文書〕

西郷左衛門尉と和与事、以所給之書札令申彼金吾候之處、如返状者、大中島島地七反を令返給候之上者、自余可止訴訟候云々、此条被載訴陳状候秋成已下名田島事候歟、且返状進候、子細見状候歟、此事已和与之(以下略)

〔宇都宮文書〕

可令早前薩摩守法師(通房)尊覚領知豊前国佐田庄地頭職(足立五郎左衛門事、尉遠氏知行之分事)右、為同国安雲村替所被宛行也者、早守先例可令領掌之状、依仰下知如件

正応三年十月四日

陸奥守平朝臣(花押)

相模守平朝臣(花押)

〔香春宮文書〕

豊前国香春社造營事、如今年五月四日宰府御奉書者、為尋沙汰、可催促在庁等之由、度々触申処、去四月廿一日、雖催促彼仁等候、惣文書者先年之比、申令焼失之由、不帶切符之間、難決候云々、此事前々御催促之時、毎度令言上候畢、次文書紛失事、当国前税所藤五大江

重平、為強盜、逢焼討之刻、所持之文書等、皆以焼失候畢、仍故少卿入道殿御時、国衙文書御尋之間、紛失之子細、則永景永、家房(種家、起請)候畢、更非在庁等矯飾候哉、同御状云々、文永六年三月廿三日御教書、香春宮造營事、如社司申状者、老岐太郎左衛門尉道房、為税所・田所職之處、背目代状抑留切符云々、甚無其謂、任先例、可出切符之由、所被仰出也、早可令催促沙汰云々、然者縦往古文書等、雖令紛失、令談合目代、出切符可持參之由、可令下知在庁等様云々、是又税所田所等、抑留切符之条、一切無其儀候之間、社家訴訟之趣無謂之次第、前々於御奉行申旧候畢、次令談合目代可出切符由事、造営用途惣員数未決定候之間、暗難支配候也、被定用途之員数候者、令相談目代、可致沙汰候、抑当社造營事、自往代有造替之由、社司令申候歟、縦国衙文書、雖令紛失候上、於社家者、尤可令帶持候哉、而無社家之文書候歟、何限国衙文書、紛失之条、無謂之旨、社司可令申候哉、一切非在庁等抑留候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言

正応四年 六月十八日

在庁散位種家(花押)
目代散位景永(裏判)

〔到津文書〕 九一号

八幡宇佐宮神官等申、当宮領豊前国野仲郷内全得・世永兩名事、右神領等、止非器甲乙人知行、被返付本主神官之由、去季六月十三日被下、繪旨之間、彼兩名依為前權擬神主道輔本領、止良晴法師知行、返付道輔跡之由、社家施行畢、仍領掌無相違之處、薩摩次郎左衛門尉経房濫妨之由、就訴申之、被尋下畢、爰経房出避状之由、神官等申之間、尋問実否之處、如今季七月廿七日経房請文者、有由緒雖令知行、為敬神、以別儀避進当宮候畢云々、此上者不及子細歟者、依仰下知如件

正安元年八月十二日

前上總介平朝臣(花押)

〔宇都宮文書〕

大和前司頼房申、豊前国田河郡柿原名地頭職事

右、当職者頼房高祖父大和前司入道道賢、右大将家御代為板井兵衛尉種遠之跡、令拜領、至祖父中内左衛門入道定空、相伝知行之間、讓与子息彦岐三郎入道覚実、畢、爰定空為令遺跡、雖分讓面々子孫、彼輩無実子之跡者、為嫡子通房分可領知、又現不調、令成他人所領之時者、通房申子細可知行、此两条者嫡々相統可致沙汰之旨、文永五年四月十日書置誠狀之處、覚実背彼狀、沽却当名於異姓他人同国御家人桑原弥四郎入道道兼之上者、任誠狀可被付惣領頼房之由、

捧件置文、就訴申、雖尋下、道兼背兩度召文、不參之間、延慶元年十二月十七日、以当国御家人陶山小次郎・日奈古孫四郎為広等、尋問難決実否之處、如為広執進今年二月十九日道兼請文者、当名地頭職者、自本主覚実子息尊智等乎、道兼子息虎夜叉丸令相伝領掌之由承伏之上、背度々催促、終以不參對之條、云儀理、云難決、無所通軟、然者則於彼地頭職者、任定空置文之旨、頼房可令領掌也者、依仰下知如件

延慶二年六月十二日

前上總介平朝臣(花押)

〔到津文書〕一〇一號

宇佐宮神官忠世申、豊前国下毛郡木原村稱重名内田地捌段本名カ・捌段

右田屋敷者、為当社一円領、忠世先祖道妙本領之條、証文分明也、沽却于甲乙人訖、而前大和守頼房所展転知行也、就神領與行可被返付之由、帶對馬前司公世奉狀、忠世依訴申、可進陳狀之由、去十

月廿日・去月五日兩度被仰畢、爰去十六日頼房所進陳狀也、如狀者、高祖父大和前司入道々賢所拜領板井兵衛尉種遠之跡也、当国税所職則種遠跡也、為在序正統勤仕連々祭会之上、月次神事不可懈怠之由、如催促之職也、社領國師・田所以下職人、尚以准神官無其沙汰云々、况頼房者令兼帶神職之間、難被准非器之由、雖載之、彼田島者非種遠之跡、号神職者就所職奉行之篇也、頼房非神官之間、難稱器用、然則於彼田屋敷者所被返付社家也者、依仰、下知如件

正和元年十二月廿七日

前上總介平朝臣(花押)

〔小山田文書〕三八

宇佐弥勤寺造管用途事、大々工貞世損色注文目安等如此、檢納米錢、且可被下行之也、仍執達如件

文保二年八月廿五日

遠江守御判

大友左近大夫將監殿
大和前司殿

〔築上郡薬師寺棟札〕

奉建立、薬師堂二字、右旨趣者天長地久、諸願門満云々

正慶元年九月

宇都宮大和守頼房敬白

〔相良家文書〕一ノ一二一

又京都・東国無為無事候、相構く不可有驚動之儀候、又中国事、高越州下向之上者無不審候、鎮西もことなる事候者、彼人可有下向之由、被仰付旨承及候

御音信悦入候、肥前・肥後凶徒蜂起間、為対治、去三日、令出府之處、肥後之国大和太郎左衛門尉城・佐殿御手河尻幸俊・詫磨宗直以下輩取籠候て攻之由、依有注進、差遣筑後孫次郎并筑前・豊前兩國守護代・

同軍勢等候了、当国事不可有子細候款、郡内事、一向憑存候、大田方にも有談合、相構可_レ有警固候、肥前事、沙汰最中候、是又不_レ可有子細候、恐々謹言
(親正元年) (三五〇) 四月廿日 (少武) 頼 尚 (花押)

〔西郷文書〕

於鎮西度々合戦之時、致忠節候由、大宰筑後守頼尚所注申也、尤以神妙、弥可_レ抽_二戦功_一之状、如_レ件
(三六〇) 延文五年三月十日 (足利義詮) (花押)

宇都宮西郷出羽守殿

〔宗像文書〕

豊前国中津郡大豆俵村事
右、為_レ増_二神威_一所令寄附也、且可_レ被_レ祈誓天下安全家門繁昌之状、如_レ件、
康安元年八月五日 大宰少武藤原冬資 (花押)

(注) 貞治四年九月、同五年三月の目録に見ゆ

〔西郷文書〕

(大内義興) (花押)

補任 西郷藏人資正

豊前国築城郡高塚村_{北野御神領}坪付在別紙之代官職事

右以人所_レ補_二彼職_一也、然者有_レ限於正税者嚴密遂_二京濟_一之、至余得分者、准武恩者也、若背_二本家命_一者、可_レ有_二改変_一之状、如_レ件
明心十年三月十三日

〔西郷文書〕

資正一跡之事、不_レ殘一段歩正滴に所令譲与也、然者任御判等之旨、全令領知、弥奉公忠勤無_レ油断可_レ抽勲功者也、仍譲与状、如_レ件

文龜元年七月七日 (西郷) 藏人資正 (花押)

〔西郷文書〕

親父遠江守資正一跡事、任讓補之旨、相統領掌不可_レ有_二相違_一之状、如_レ件
永正四年二月廿三日 (大内義興) (花押)
西郷弥七郎殿

〔西郷文書〕

家頼事、城井・山田何之領被_二相動_一候哉、前々之儀、委細可_レ被_レ申之由候、恐々謹言
(天文元ごろ) 六月十六日 (貫) 武助 (花押)

西郷治部丞殿 (家頼)

〔西郷文書〕

対馬守所望事、可_レ令_二學_一京都之状、如_レ件
(一五三四) 天文三年六月廿九日 (大内義隆) (花押)

西郷治部丞殿

〔西郷文書〕

代々感状等、今度於_二出雲国_一令_二紛矢_一云々、奉公次第捧_二目安状_一、申所令一見畢、仍状如_レ件
(天文十ごろ) 六月廿二日 (大内義隆) (花押)

西郷彦三郎殿

〔西郷文書〕

為_二上国之儀、兩種到来、喜悦候、猶曰杵安房守可_レ被_レ申候也、恐々謹言

(天文廿一年)

十二月廿八日

晴英 (花押)

西郷刑部丞殿

〔西郷文書〕

至_二其 御屋形様、為_二御祝儀言上之趣、令披露候、御悦喜之段、被_レ

成_二御直書候、尤日出度候、仍於私太刀一腰・鳥目百疋送給候、畏入

候、從_レ是茂一振進_レ之候、猶重々可_レ申承候、恐々謹言

(天文廿一年)

正月十八日

(日杵安房守) 鑑統 (花押)

西郷刑部丞殿御報

〔西郷文書〕

注文

一、黒坂八町 一、友枝拾老町七段

一、金石拾三町 一、山下四町

一、土財三町

以上

(天文廿一年)カ

西郷刑部丞 隆頼 (花押)

麻生撰津守

谷口左京亮

(裏書) 右承之地事、先以敷被_レ置之、追而可_レ有御愁訴候 鑑益 (花押)

〔西郷文書〕

去月廿七日注進状到来、慥令披露候、此表諸口無_二異儀候、何茂堅固

可_レ被_レ仰付候_(事)肝要候、其表事、鑑益被_レ申談_(田北民部丞カ)之後、最前別而馳走次第、具達 上聞候、尤神妙之由被_レ仰出候、必以_二静謐上_一、可_レ被_レ成_レ御感之旨候、弥忠儀可_レ為_二肝要_一之由候、仍逆心張本人渡辺对馬守父子三人事、任_二鑑益裁判_一、城井左馬助被_レ申談、被_レ相果_二之由、被_レ成_二御心得_一候、則对_二杉隆相_一、被_レ仰聞候、相易儀候者、切々注進可_レ為_二專一_一之旨候、恐々謹言

(天文廿一年)カ

七月一日

(小奉行大庭図書允) 賢兼 (花押)

(高橋) 鑑種 (花押)

西郷刑部丞殿

〔西郷文書〕

(大内義長) (花押)

父家頼所帶事、任_二去天文六年四月十日龍福寺殿証判之旨_一、西郷刑部丞隆頼領掌不_レ可_レ有_二相違_一之状、如件

天文廿一年十一月九日

(一五五)

〔西郷文書〕

筑前国早良郡之内姪浜三拾町地_(探頭先事)、被_レ補置 公領畢者、御代官職之事、任_二先例_一、嚴重執沙汰可_レ為_二干要_一之旨候也、仍執達如_レ件

(一五五)

天文廿四年九月廿三日

(弘中賢俊) 右衛門尉 (花押)

(河原隆通) 伊豆守 (花押)

(波多野興滋) 備中守 (花押)

(仁保隆恩) 右衛門大夫 (花押)

(青景隆著) 越後守 (花押)

(豊田英作) 美濃守 (花押)

兵庫頭 (花押)

弘中三河守殿

〔西郷文書〕

いづくしまおもての事も、うきすいりやう候、こなた心中とうせんに候、しせんよきちうしんもあるへく候やと、まち入へかりに候、なお、たんの守申へく候、かしく

(天文廿四年) 十月三日

おこり参人々

(大内) よし長(花押)

〔西郷文書〕

ちゝたか兼一跡事、梅女さうそく相違あるへからざる状、如件

(大内義長) (花押) (弘中隆兼) (毛利) 天文廿四年後十月七日

〔西郷文書〕

今度旁儀、此方御取退、尤本望候、两国弓矢儀、是非共来春可存立候条、諸境日之事、内々御調略肝要候、猶山田安芸守方可被申候、恐々謹言

(永禄二年)カ 十一月十日

(隆頼) 西郷遠江守殿御宿所

(毛利) 隆元(花押) 元就(花押)

〔西郷文書〕

当城□□□□之覚悟、無三比類候、弥堅固之儀肝要候、殊去比、於貫分捕高名、誠感悦不少候、猶以使者可相謝候、恐々謹言

(永禄四年) 壬三月廿九日

隆元(花押) 元就(花押)

西郷遠江守殿

〔西郷文書〕

豊前国之内五拾町分^{坪付在}別紙之事、預置候、可^レ有^レ知行候、恐々謹言

(永禄七年ころ) 七月廿五日

西郷遠江守殿

〔西郷文書〕

豊前表動申付之条、馳走肝要候、香春岳人数相加可^レ被^レ罷出候、於^レ趣者 宍左、粟縫可^レ申候、恐々謹言

(永禄十二年) 壬五月十七日

西郷遠江守殿

(毛利) 輝元(花押)

〔西郷文書〕

豊前国分寺領内塔田村政所職事 右、於^レ彼職者令^レ領知、恒例御年貢御公事等、無^レ懈怠可^レ致其沙汰者也、仍状如^レ件

(隆頼) 曆応三年十月廿五日

弓削田孫増御前所

〔西郷文書〕

弘中隆兼当知行分愁訴之儀、去年以雜掌旨趣言上之通、諸老申談、遂披露之処、对^レ義長忠貞無^レ比類之条、可^レ替^レ余人之由、被^レ仰出、当知行安堵之被^レ成^レ御下知候、然処、本知行之内、板付村之事、号^レ公領、小原因^(隆頼)幡守裁判之条、各家中被^レ迷惑之通、無^レ余儀候之間、板付為^レ替地、那珂郡之内五十構之村廿五町、同郡之内下長村三拾町并本知

行筵田之郡内馬淵兩免田之事、先以有_レ知行、堪忍專要候、鑑統參上之儀候条、重々遂_レ披露、御正判等詞可_レ進_レ之候、右在所難洪之仁候共、不可_レ有_レ承引_レ候、随而方_一於_レ此界、篇目出来候者鑑統家来衆被_レ申談、被_レ励_レ忠儀_レ候者弥可_レ被_レ成_レ御感_レ候、為_レ存知_レ候、恐々謹言、
(天文廿二、三)
(白性) 鑑統(花押)

弘中殿

〔仲間文書〕

先書如_レ申候、毛利兵部入道其界江滞留候、尤肝要候、統胤領内之条、雖_レ不及_レ氣仕_レ候、弥可_レ被_レ添_レ心事頼存候、随而城井民部少輔事、順路之覚悟深重之故、秋月・高橋已下之悪党申組、至_レ鎮房_一可_レ被_レ懸催_レ之由候、適龍真在山之条、被_レ申談、毎事可_レ被_レ励_レ馳走_レ事專_一候、必以使節_一可_レ申候、恐々謹言、
(天正八、九年)
(統胤) 仲間左馬進殿

仲間左馬進殿

〔大友家文書録〕

豊前西部之悪党、至_レ下毛表_一令_レ現形、所々狼藉不_レ穩便_一之由、從方々注進到来候、就_レ夫野仲兵庫頭加勢之儀申候条、追々可_レ差立_レ覚悟候、然者各事辛勞雖_レ無_レ尽期_一候、支度等以_レ心懸_一一左右次第、不日可_レ被_レ打出_レ事肝要候、先々為_レ檢使_一帆足右衛門大夫、森左馬助急度差遣候条、自然之時者可_レ被_レ添_レ心事可_レ為_レ祝着_レ候、旁不_レ可_レ有_レ油断_一之趣、猶齋藤紀伊入道可_レ申候、恐々謹言、
(天正九年)
(統胤) 義統(花押)

十一月十四日

義統(在判)

岐部山城入道殿 小田式部少輔殿 平井河内入道殿
惠良左近大夫殿 魚返伊豆入道殿 太田宮熊殿
惠良孫三郎殿 松木相右衛門尉殿 古後主計允殿

野上治部少輔殿 其外郡衆中

〔大友家文書録〕

如_レ注進到来者、其表悪党令_レ現形、既下毛郡中迄、相給_レ之由候、不及_レ是非_レ候、然者妙見岳可_レ及_レ氣遣_一之条、此節郡衆中被_レ申談、別而可_レ被_レ励_レ忠貞_一事簡要候、彼城入_レ敵案_一候者外聞無_レ残所_一之間、加勢不_レ可_レ有_レ油断_一之儀候、仍刀一腰進_レ之候、誠頭志計候、猶足田舎人入道可_レ申候、恐々謹言、
十二月十七日 義統(在判)

十二月十七日

義統(在判)

飯田但馬入道殿

〔佐田文書〕

急度染筆候、仍西目之悪党、於_レ下毛表、于_レ今相灌_レ之由候、如_レ此浮出候事、幸之儀候之条、野仲兵庫頭申談、為_レ可_レ討果_一、玖珠郡・由布院衆、不日差立候、定而可_レ為_レ著陣_一候、然者各事辛勞雖_レ無_レ尽期_一候、紹忍・親盛被_レ請_レ指南_一、即刻被_レ打出_一、一行可_レ有_レ馳走_レ事頼入候、於_レ様躰_一者委細夏足民部少輔含_レ口上_一候、恐々謹言、
(天正十年)
卯月六日 義統(花押)

卯月六日

義統(花押)

飯田三右衛門尉殿 弥富对馬守殿 卜野次郎殿
矢部三郎殿 中山左近助殿 斎藤弥二郎殿
中山彈正入道殿 惠良勘解由允殿 副兵部少輔殿
佐田彈正忠 殿

〔内尾文書〕

昨日廿六西衆取出付而其元衆申談、上毛相働、別而碎_レ手、頸一討捕之由、寔感悅無_レ比類_一候、必一所可_レ賀与_一候、恐々謹言、
(野仲) 鎮兼
卯月廿七日

卯月廿七日

鎮兼

内尾藤太郎殿

〔大友家文書録〕

豊前西目之悪党、近々至下毛表可取出催之通、從方々注進到来候、於事实者諸軍即時可打出候之条、為先衆、玖珠郡・由布院衆申付候、然者其方事、近年在陣辛勞、雖無尽期候、玖珠郡檢使之儀、斎藤紀伊入道、石合右京亮同前可預馳走事、可為祝著候、去春敵現形之刻、稠雖加下知候、檢使依遲陣、至野仲兵庫頭、不遂加勢候事無是非候、此度之儀、至各早々被申合、不可有油断之儀候、恐々謹言

六月九日

義統 在判

上野遠江守殿

〔成恒文書〕

(高橋元種
(花押))

坪付

下毛部内

一所五町

田口東西并散在分
冠師野加之

一所式町

金法師名

一所九段拾代

実徳時元名

一所老町余

慈雲寺分岡崎

一所六段

末藤名

松藤江源庵加之

一所九段

房籠名

以上
天正十年

七月二日

成恒越中守
(銀忠)

右前、先以令裁許候、何茂以忠儀之上、重畳可申談候也、以上

〔成恒文書〕

(花押) (高橋元種)

坪付

下手部
一所式町參段 女院并散在分
坂大地原加之
一所參町 永久名
一所老町九段 田口今行分
中殿名
以上

(二五八二)

天正拾年七月廿四日

成恒越中守

鎮直

右地之事、社領之儀候間、至社家茂可被仰調候、為此方、聊不可相違候也矣

〔内尾文書〕

今日廿七、城井衆相給候之処、最前懸合、別而依勵粉骨、足被手火矢痕之由、寔軍勞次第、感悅至極候、毎々如此之刻、抽辛勞由、聊無忘却候、弥於忠儀者、必一所可令扶助、猶大神右衛門大夫可申候、恐々謹言

十一月廿七日

(野仲)
鎮兼

内尾藤太郎殿

〔宇都宮文書〕

(上略) 然処、此度福島佐渡逆意之条、先首尾至義統申理(下略)

(天正十年)カ
十一月廿八日

府蘭(花押)

佐田彈正忠殿
(銀綱)

〔萩原文書〕

其後者無音之至、心外候、尤節々雖可申入候、通路依不輒不通之様候、聊非心疎候、仍香春・馬岳申談、至其表、少人数差出候、相応之行可被仰談候、尚用口上候、恐々謹言

三月十五日

(秋月)
種実(花押)

萩原山城入道殿 御宿所

〔萩原文書〕

其境□□為可申付、種実申談、今日十六出勢申候、万端可被申談事
肝要候、早晚ながら、旁馳走之段、雖無緩、此節別而令相心懸、外
可然様、可令勵忠儀、御頼入候、為存知、恐々謹言

三月十六日

高橋元種(花押)

萩原美作入道殿

〔萩原文書〕

於其表、各出勢候之条、為証明人、從此許も少人数差立候条、相応
之行可被仰談候、猶吉左右待申候、恐々謹言

卯月十六日

秋 種実(花押)

萩 山 申入候

〔萩原文書〕

態用飛脚候、仍而其表動様子□□候、定可為勝利分明候、雖不
及申、出陣之者共被仰談、相応之行、肝要候、隨而此境聊無異議
候、可御心安候、猶期後喜候、恐々謹言

卯月十七日

秋 種実(花押)

萩原山城入道殿中上候

〔佐田文書〕

如伝説者於当郡中、無実所事共申散由候、不及是非候、定而從
敵方之可為邪說候、鎮綱運々之覚悟、令存知候之条、縱如何休之儀
申妨候共、愚老如此候上者可御心安候、殊近々出勢付而前上義統令
出府、至諸界目加下知候之条、不謂遠近、忠貞之心懸此節候歎、

鎮綱親類被官已下之儀者不及申、方角衆之事、毛頭無氣仕様、寄々入
魂肝要候、可被得其意候、恐々謹言

七月十五日

府蘭(花押)

佐田彈正忠殿

〔萩原文書〕

任到來之旨、先日、從元種、手火矢少々、其許迄差遣候、弥相催候之
条、出勢不可有余儀、雖無申迄、其境之儀、御心懸肝心候、恐々
謹言

七月廿五日

秋 種実(花押)

萩原山城入道殿机下

〔萩原文書〕

至其表、豊州衆差出之由、從宇佐三家、此比到來候、必定候哉、無
心元存知候、先々為先衆、少人数差遣候、諸事無緩可被仰談候、不
可有忘却候、種実申談、人数可差統候条、可御心安候、恐々謹言

八月十日

高橋元種(花押)

萩原入道殿遣之候

〔萩原文書〕

追而呈出將監差遣候条、諸事可被申談事肝要候、
其表之立柄為可聞合令啓候、細碎可被申越事頼入候、出勢事、近
日、疑令儀定之条、無油断覚悟專要候、尚重疊可申候、恐々謹言

九月五日

高橋元種(花押)

萩原山城入道殿

〔萩原文書〕

就「今度出勢」、馳走之段令「祝著」候、然者數田庄内二十五町地事可「令」有「知行」候、向後可「勵」忠儀「事肝要候、猶土師但馬守・安田山城守可」申候、恐々謹言

九月廿一日

萩原山城入道殿

高橋元種(花押)

〔秋原文書〕

於「其表」、少人数差出候之処、乍「案中」、各以「御辛勞」多分勝利之由、從「東陣」之者共「申越候、千喜万悦候、弥御境成り直り候様、御才竟不」及「申、隨而此表乍」勿論「無」異儀「候、可」御心安「候、猶重々御吉左右待申候、恐々謹言

十一月九日

一雲 申入候

秋 種実(花押)

〔秋原文書〕

今度、至「其表」、敵取懸候処、各被「碎」手、被「得」勝利「候之由」到来、誠「無」比類「候、定而」□□敵相堪候哉、然者此方加勢之儀、無「余儀」存候条、至「隆信」内談候処、日田口、宝満表、為「押佐賀衆可」差上「之由被」申候間、元種申談、此方人数、急度可「差渡」議定候、船誘等之儀、別「土但」へ申、陳所以下之事者、広種へ申遣候、其内可「令」相拘「覚悟專」候、猶期「後声」候、恐々謹言

(年月日未詳)

一雲 申入候

秋 種実(花押)

〔秋原文書〕

懇令「啓候、仍先日豊衆打入候以来、其表無」異儀「之由、尤可」然候、併「珍儀共候之哉、示預度候、至」香春「、節々被」仰遣「候之趣、銘々令」承知「、

無「余儀」存候旨趣、從「香春」可「申達」候、隨而喉輪吉懸進「之候、誠補音信」計候、恐々謹言

十一月十七日

萩原山城入道殿 御宿所

秋 種実(花押)

(奥ウハ書)
〔天正十一・十一ノ廿二〕

〔秋原文書〕

今日廿九、粹少人数差立候、□□別而馳走之覚悟旨、從「此仁」御内談此節成立候様肝心候、其許□次第、我等事中途迄可「差出」覚悟候、猶用「口上」候、恐々謹言

十一月廿九日

一雲 殿中上候

秋 種実(花押)

〔秋原文書〕

其表敵□敗北之由、尤可「然候、加勢之内談、聊無」信疎「之趣、土但可」相達候、隨而此表所々勝利之段、定可「有」其聞「候、何様比脇東西之」□□可「申談」候、可「御心安」候、每々其御入魂之儀、聊無「忘却」候、恐々謹言

十二月十一日 秋 種実(花押)

萩原山城入道殿

〔菅嶋文書〕

今度、至西大野宮山、芸州衆數輩桶籠之条、至五月廿日、取懸之処、軍勲抽之、剩一城落去之刻、夜中馳登最前、心懸之次第、感悦之至候、同於杉・西郷兩城茂累日防戦之段、令承知候、必追而可「合賀」与候、弥忠貞肝要候、恐々謹言

六月廿八日

菅嶋美濃守殿

(田原) 親宏(花押)